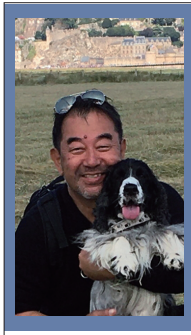

小橋敏弘の ニッポン大好き！Hello Japan
ヨーロッパ在住40余年、外から見ていた日本！

Vol.21 老人ホームも見方によれば刑務所？

私が住んでいるスイスでは、（各自治体ごとに名称は多少異なりますが）俗に言われる老後介護ホームが設けられています。一部の超富裕族のご老人は多額の入居料を払い超豪華なプライベートの介護ホームへ入居します。

筆者が偶然目にした老後介護ホームの夕食の風景が、アメリカ等の映画でよく見る刑務所での受刑者の食事の様子にオーバーラップされた事です。

筆者の家の3階のバルコニーから、近所の老人ホームの食堂の風景が、特に夕刻の薄暗い時間に夕食をされている様子が目に入ります。

添付の写真ですが、よく見ていただくと最初の写真がアメリカの刑務所内での食事中の風景（たとえはひどいのですが）、私語も許されず食事をとっている囚人さながらの風景でした。老人ホームでは、高齢者の入居者の間では年齢のせいかあまり会話も進んでいないうえに、なぜか一人で寂しく食事をとっているご老人が多いのです。入居者は一日の大半を自分の個室で過ごし、食事の時だけ食堂によばれ、仲の良い入居者と一緒に談笑しながら食事をしているとは到底見受けられない殺風景さに恐怖さえ感じてしまいました。誠に寂しいと言うか悲しい現実を目の当たりにした感じでした。なぜ入居者が一人で食事をするのか尋ねてみたところ、ケアマネジャー曰く、「本人の希望だ」という返事が返ってきました。煩雑な他人との付き合いとか会話も面倒になってきているのでしょうか。

一般的に入居しているご老人達は、人生のほぼすべてを家族のために尽くし、多くの老人はホーム入居直前まで、子供や孫たちの世話をし、ほぼ人生のすべてを捧げてきた人ばかりでしょう。子供の世話になりたくないと自分から早めに入居されている老人もいらしゃるそうです。でもそれは本人の正直な気持ちでしょうか、もしかすると最後まで家族と一緒に長年住み慣れた家でと考えている人が大半かもと自問自答をしてみますが、もしかするとそれはかなりハードルの高い贅沢な選択肢かもしれません。イヤー誠に難儀なテーマですね、特に70歳目前の筆者は、いつまで家族やパートナーと一緒に日々の生活をエンジョイできるのか、誠に他人ごとは思えない大変複雑な気持ちをいだいております。

ここからの添付の写真は、一般的な老人介護ホームの風景です。

スイスでは先進諸国のなかでも数少ない尊厳死を法律で認められている国です。そんな国でも、人生最後まで人間として生きれる自己実現の権利は認められないのでしょうか。人は死ぬとお墓に入ります。その一つ前の停車駅が老人ホームなのでしょうか、非常に難しい問題です。今もなお世界の各地で無駄な戦争をやっている報道を見ては悲しみ、反面平和な世界に身を置く筆者も、さほど遠くない将来に見えてくる終着駅「介護ホーム」が自然と頭に浮かび上がっており、人生の終活をどのように準備してよいのやら、自問自答を繰り返す毎日です。

非常に重いテーマになりましたが、世界中の人が憧れるスイスでさえ、この永遠のテーマが日々語りつがれていることを、日本の読者に少しでも伝えたかったのでした。とにかく一日でも長く健康でいられる事を願うしかないですね。笑顔を忘れず、可能な限りポジティブ志向で日々をまっとうするしかなさそうですね。

ps、もし読者の方で、自分はこんな考えだとか理想をお持ちの方がおられましたら、感想メールを送ってください。

写真/筆者（右）と妻

profire 小橋敏弘

年齢、もうすぐ７０歳。

１９７５年からヨーロッパ在住。その大半はスイスの企業にてサラリーマン生活をし、６４歳からリタイア生活をエンジョイしています。

学生時代をイギリスで過ごし、大学卒業後はスイスに移住。孫６人に囲まれている爺さんです。

趣味は何にでも興味を持ち、最近ではChat GTPを駆使して、幅広い分野を勉強中。

母国語日本語を再勉強しながら、ドイツ語、英語も同時に駆使し、ヨーロッパ各国に住んでいる友達とコミュニケーションを取っています。

唯一、体を動かす趣味は、ここ１０年ほど毎週一回ぐらいのペースでやっておりますCountry Line Danceです。